

ろしているようだった。パークス氏によると車の維持費と教会への献金が住民の家計の重要な支出項目になっているとのことである。

戦後の南部の発展は著しく、西部とともにサン・ベルトの一角を占めるようになっていく。この発展の契機となったのは航空・宇宙産業の立地だった。ランキン氏の案内で私たちにばかりはNASAの宇宙技術研究所を見学する機会を与えられた。ここはロケットエンジンのテストを行なうところである。構内には発射台と同様の巨大な塔が2基設置されていた。テストが行われるときは30kmほど離れたランキン氏宅でも振

動を感じるという。

私たちはランキン、パークス両氏のほかに、パークス氏の3人の子供さんとパークス夫人の妹さんの家庭を訪問した。これらの家庭を見たかぎりでは、南部の人たちは平均的アメリカ人の生活がそれ以上の生活を楽しんでいるように思われた。「貧しい南部」を見ることはついになかった。短期間の滞在で地域の実態を知るのはどうも無理ではあるが、私たちが見たものは変貌しつつある南部の一面であることに間違いはない。貴重な時間をさいて私たちを案内してくれたランキン夫妻とパークス夫妻には感謝の気持ちで一杯である。

## 女性研究者と国立女子大学

### 三 上 岳 彦

本学と奈良女子大学は、入学者を女子のみに限定しており、本来共学が立て前の国立大学にあって例外的な存在になっている。かつては男子のみに門戸を開いていた商船大学などでも、現在では女子の入学を認めている。世間では、国立大学が女子だけに入学を制限するのは違法であるというような声をよく耳にする。また、学生の側にも、国公立を問わず女子人離れといった現象が出てきているとも言われる。国立女子大学に奉職する一員として、世間一般とは多少異なった観点から、とくに女性研究者との関連で国立女子大学の存在意義について考えてみたい。

わが国では、社会主義国は無論のこと、西欧自由主義諸国に比較しても、あらゆる分野で女性の社会進出が遅れている。社会のしくみが男性中心にできており、女性の側にもそれを特に不思議とも感じない風潮が存在する。男は外で働き、女は家事・育児に専念することが当然視されている。したがって、政党の党首や中央官庁の管理職に女性が登用されるとマスコミで大きくとり上げられたり、女性のタクシー運転手が珍しがられたりするのである。

学問・研究の分野においても、日本の女性研究者の占める地位・身分は諸外国に較べて著しく低い。現実には、国公立を問わず、大学や研究機関に所属する女性の比率は低く、その身分や地位も決して高いとは言えない。数年前に訪れた中国では、国立大気物理研究所の研究員の20%強が女性であったし、米国の学会などに参加しても女性研究者の姿が多いのに驚かされたこと

がある。日本の国内の学会では、筆者の属する地理学会・気象学会に限定しても、女性研究者の数は異常に少ないのが現状であり、多かれ少なかれ他の研究分野においても同様のことが言えるのではなからうか。

ここで女性の学問・研究への適性や出産・育児による研究の中断といった特殊事情を論ずることは無意味である。むしろ、研究意欲が充分あるにもかかわらず、それを継続し発展させてゆく場所（具体的には、大学や研究所）を与えられないことに問題の本質がある。運よく大学教官に採用されても、多くの場合、助手や講師といった不安定な身分に甘んじなければならない。この傾向は、特に国立の共学校において顕著に認められる。国立大学の頂点に立つ東大でも、助教授以上の女性教官はほんの数えるほどしかない。昇進できないのは、能力の問題というよりは、むしろ男性中心の日本の社会構造が大学という学問研究の場にも現れたからにすぎない。

ところで、国立の女子大である本学の場合はどうだろうか。昭和61年5月1日現在の職員録をもとに講師以上の専任教官の数を調べてみたところ、全学141名のうち、女性教官は40名を占め、その比率は28%強である。学部別にみると、もっとも女性教官の比率が高いのは家政学部で33%強、次いで理学部の29%弱、文教育学部の26%となっている。いずれにせよ、本学の教官（助手を除く）の4人に1人以上は女性ということになる。この数字は、他の共学国立大学に比較しても相当高いといえるだろう。半数とまではいなくても、その比率

が2割を越えると、少なくとも女性教官の存在に違和感をもたなくなることだけは確かである。学問・研究分野での厳然たる女性差別の事実が存在する限り、女

性研究者の地位と身分を保障する場としての役割の一部を担う国立女子大学の存在意義は充分にあると思う。

## 1986年夏：パレルモ雑感

栗原尚子

昨年、8月上旬から10月中旬にかけて海外学術調査の研究分担者の1員として、バルセロナにて調査する機会をえた。2年目のスペインであったが、夏の地中海地域の混乱ぶりは想像はしていたもののこの期間に調査などできるものでないことを改めて実感した。関連研究期間は総て夏休み、街中は観光客でゴッタがえし、一体「観光」とは何なのか考えこんでしまうほどである。とはいってもその来年刊行されるスペイン統計書には、かく言う私も1トウリストとしてカウントされるのではあるが。また、スペイン人からみればヴァカンスもとらず働き続ける日本人の方がもっと想像できない代物であろう。

今回の共同調査は、シリア、エジプト、ギリシャ、ユーゴスラヴィア、イタリア、スペインに分かれてそれぞれの分担課題に取り組むものであったが、比較調査という点から各自の本調査地以外も訪れる機会が与えられた。私の場合はイタリア、シチリア島のパレルモであった。勿論、パレルモに行くのは初めて、一体マフィアの故郷はどういうところか期待に胸ふくらませでの旅行であったが、行き着くまでがそうは簡単にいかないのが地中海世界、早速ローマ空港で全速力で走り回る結果となった。パレルモまでの国内便に乗り継ぐまで約2時間あったので、十分と思いきや、パスポートコントロールが長蛇の列、しかも遅々として一向に前に進まず、またおよそ待つことなどできない性格上の欠陥も加わってイライラ度はその頂点に達した。しかし、これには当然の理由があった。当時とみに爆弾テロが続発し、それに対する警戒が厳重になっていたのである。とくにローマはテロリストの拠点になっているともいわれ、従って南からの旅行客に対するパスポートチェックは徹底して行われていた。空港内を走り回った結果、こういうこともあるかと前の経験から機内持ち込みの荷物のみであったのが幸いし、ボーディングカードもなしでかなり強引に予定の飛行機に乗ることができた。乗り込んだものの不安になって思わず隣

の乗客に、「これパレルモにいくよね」と聞いた次第。

パレルモの第一印象は、スペインから外国に來たという実感がわかなかったことである。まるでスペインの南、アンダルシアにいるような錯覚におそわれた。パレルモがスペインの支配下にあったという歴史結果となった。パレルモはあるもののそれによるよりも「地中海世界」という共通性をむしろ感じさせるものであるのかもしれない。ここ14年間に渡って続けてきた我々研究会の共通テーマである。

パレルモは人口40万人の大都市であり、ここにはイタリアの栄光と衰退とが総て揃っているという。確かに栄光を物語る歴史的遺産は多い。しかし私の目を奪ったのは、この都市のかつての心臓、都心内部の崩壊ぶりであった。中心商店街の建物は、1階は商店として利用されているものの2階以上は人が住めないような状況になっている。崩壊にさらされたままの建物もある。地震等の災害によらずとも自然に都市がどうやって崩壊していくのかを目の当りに見る思いであった。しかし、この問題はなにもパレルモに限ったことではない。バルセロナにおいても都心再開発は問題になっており、また、バルセロナにて開催されたIGCではシンポジウムテーマ「地中海地域における歴史的都市の再開発」としてとりあげられた。ただ、バルセロナのように再開発のために公共投資がなされているところに比べると、パレルモでは計画はあるもののシチリア経済の衰退のために実現はさらに困難になっている。都心内部の崩壊に対して、郊外には中産階層の住宅地が拡大している。

シチリア経済の衰退を象徴するもう一つの出来事に遭遇した。81年の歴史を誇ったパレルモサッカーチームの解散である。巨額の借金をかかえ、その返済計画が不十分であることから、イタリアのナショナルリーグを除名された夜、街は怒れる若者であふれ、翌日も抗議のデモ隊で混乱した（物見高いというもう一つの欠陥からデモ隊の後をついてまわりましたが）。背後